



言葉の力

前号の災害の話と関連して。まず引用。

＊

関西大学バレーボール部監督の岡田哲也さん(49)は、発生から23年になる阪神・淡路大震災で実家が全壊し、両親と姉、めいの4人を亡くした。自分だけが生き残り、「死にたい」との思いにさいなまれたが、傷ついた心と向き合い、前を向いた。今では若者に伝えている。命の大切さ、人の優しさ、身の回りにあるものすべてへの感謝の気持ちを。

震災時、同県西宮市の木造2階建て住宅の2階で寝ていた。1階には父の直之さん(当時56)と母の初江さん(同53)のほか、帰省中の姉の和代さん(同31)と1歳のめいの里紗ちゃんがいた。

激しい揺れで目覚め、部屋から出て1階に行こうとしたが、扉が動かなかった。窓辺に寄ったが雨戸も開かない状態。真っ暗な部屋に閉じ込められた。約15分後、近所に住む親戚が助け出してくれたが、目の前の光景にがく然とした。1階は2階に押しつぶされていた。4人の遺体は地元の体育館に運び込まれた。火葬されるまで約1カ月間、寝泊まりして寄り添い続けた。

震災から約2カ月後、システムエンジニアとして働く職場へ復帰したが、自分を責めるようになった。「自分の重みで家族を殺した」。元気に振る舞ったが、「生きる資格も、幸せになる資格もない」と、死ぬことばかり考えていた。

職場復帰後、ほどなくして友人に誘われ、大阪の湾岸部で開かれたバレーボール大会に出場した。「幸せになってはいけないのに、なぜ勝とうと頑張っているんや」。そう思うとたまらなくなった。「海へ飛び込んで死んでやる」。会場を飛び出した。

しかし、途中で「自殺したら誘ってくれた友だちはどうなるんだ。自分と同じ苦しみを背負わせるだけだ」と気づいた。立ち止まり、その場で泣いた。

死んで楽になりたい――。でも自殺すれば、支えてくれた親戚、食料や物資を届けてくれた友人や同僚たちを悲しませてしまう。死ぬわけにはいかない。苦しみを心の奥底にしまい込んだ。

転機は2004年夏に訪れた。自宅で一日に2度、地震の揺れを感じた。翌日になっても「また起きるのでは」という不安がよぎった。家族を思い出し、涙がこぼれそうになった。「自分はどこかおかしいのでは」。勤務先の医務室で看護師が話を聞いてくれた。「おかしいことなんてないよ。一人で抱えて頑張ってきたんやね」。その一言に救われた気がした。

「心が癒えないのは家族が大切な存在で、愛情をたっぷり注いでもらったから」「家族は僕が殺したことなど忘れ、『幸せになれ』と応援してくれているのかもしれない」。そう思うと吹っ切れた。

看護師との出会いから心理カウンセラーに興味をわいた。「苦しみを抱えてきた自分だからこそその苦しみにも共感できるはず」。06年から大阪の心理カウンセラーの養成学校に通い、資格を取得。08年に会社を退職し、現在は企業で従業員らのカウンセリングをするなどしている。

昨年12月、大阪府吹田市の関西大千里山キャンパスの中央体育館。「目指すチームになるには、一人ひとりの意識を高めないと」。男子部員らに語りかけ、技術を細かく助言する哲也さんの姿があった。

「悲しみをいっぱい味わったが、大切なものも多く学んだ。カウンセラーの仕事も部活も、命を大切に、そして自分の人生を大切に幸せになってほしいと願い、接しています」(朝日新聞17日朝刊)

＊

私はこの話から「言葉の力」を連想する。たった一言が人を救うこともあるのである(その逆も…)。その力に思いをはせたい。